

編集後記

- ◇ いも類振興会の平成29年度第2回通常理事会は3月23日に開催され、30年度の事業計画書と収支予算書が承認された。次いで、平成29年度の監事監査の実施に引き続き、30年度第1回通常理事会が5月15日に、定時評議員会は5月30日に、三会堂ビル会議室で開催され、平成29年度の事業報告書と財務諸表等が承認された。ご審議頂いた役員の方々にはお礼を申し上げたい。
- ◇ 本号No.136号の特集では、例年に習い「平成29年度いも類講演会から」と題し、本年3月9日に開催された「いも類講演会」での講演概要を各講演者に依頼して、寄稿して頂いた。29年度の講演会は、悪天候にも拘わらず例年を大きく越える84名の参加者が有り、ジャガイモ、サツマイモ関係の最新の動向や研究成果を熱心に聞き入っていたのが印象的であった。なお、講演の合間に、各種の試食品が提供され好評であった。講演者の皆様にはお礼を申し上げたい。
- ◇ 農水省は、本年2月6日付けで「平成29年産春植えばれいしょの作付面積、収穫量及び出荷量」を公表した。これによれば、春植えばれいしょの全国収穫量は235万トンで前年比9%の増加となった。主産地の北海道においても収穫量は187.9万トンで前年比10%の増加となっている。この増収は、作付の多い北海道においておおむね天候に恵まれ、台風による被害等が著しかった28年産を上回ったためとされている。確かに、一昨年の27年産と比較すると29年産はほぼ同水準であり、29年産は増産というより、平年ベースに戻ったという方が適切かもしれない。ただ、気がかりなのは最近の青果用ジャガイモ市況の低迷である。平年に比べて大幅に安くなっているのは生産者にかなり厳しい状況と言えよう。
- ◇ 本号No.136号の海外情報に、北海道教育大の出口講師から「バレイショ収量予測モデルを用いた収量水準の国際比較」を寄稿頂いた。このモデルは気象データ、実収量、植え付け日と収穫日によって構成されており、モデルによって得られる収量の推定値は、その生育日数及び気象条件において、病虫害がないときに達成可能な収量（潜在収量）となっている。この潜在収量と実収量の比率（A/P比）の比較検討により、栽培技術や品種改良の収量向上の方策が明確になるという提案がなされている。一方、このモデルによれば、地球温暖化の進行により北海道でも夏季の高温ストレスが深刻化する可能性があり、仮に2℃の気温上昇で、道南地域の潜在収量は5～10%程度低下するとの想定は示唆に富んでいる。

（鈴木 昭二）

いも類振興情報 第136号

2018(平成30)年7月15日発行

定価 1部 500円
年間購読料(季刊) 2,000円

発行 一般財団法人 いも類振興会

〒107-0052 東京都港区赤坂6-10-41 ヴィップ赤坂303
TEL 03-3588-1040 FAX 03-3588-1225

E-mail: imoshin@fancy.ocn.ne.jp
郵便振替 00130-1-110152

印刷 株式会社丸井工文社